

ド・ロ版画印刷年代考

大浦天主堂キリシタン博物館研究課長・学芸員 内 島 美奈子

東北芸術工科大学准教授 杉 山 恵 助

はじめに

2018年度の調査によって88点ものド・ロ版画の現存が確認された¹⁾。大浦天主堂キリシタン博物館はそのうちの23点を収蔵する。同館はド・ロ版画の制作地である大浦天主堂境内に設置されており、ド・ロ版画を含む、カトリック長崎大司教区の収蔵資料を管理している。ド・ロ版画の収蔵館としては最多の数を保管しているものの、収蔵経緯に関する情報はほとんど残されていない。また、版木が現存していることから、繰り返し摺られていると推測され、印刷時期の異なるものが混在している状況である。実際に昭和初期に摺られたことが報告されており、現存するド・ロ版画のすべてが、必ずしも布教・司牧・礼拝のために使用されたものではないということになる。この点はド・ロ版画が19世紀に始まる再布教期に果たした役割について考えるうえでも重要な問題である。よって、同一の版木で摺られた同主題のド・ロ版画において、ド・ロ版画本来の目的のために印刷されたものとそうではないものとの区別は、ド・ロ版画研究における課題のひとつと筆者は捉えている。

そこで本研究では、大浦天主堂キリシタン博物館が収蔵するド・ロ版画を中心に印刷時期についての検討を行う。ド・ロ版画の表装や修復痕などの資料自体から読み取れる情報を指摘する。さらに大浦天主堂や神学校の動向とド・ロ版画の昭和時代の印刷に関する情報を整理し、ド・ロ版画の制作から活用の時期、そして本来の役割を終えた後の受容の流れをまとめてみたい。

1 ド・ロ版画の制作時期

本章では先行研究をもとに、ド・ロ版画の制作時期に関する情報をまとめる。さらに表装にも注目し、その時期を検討する。

1-1 ド・ロ版画の制作時期とその背景

ド・ロ版画とは、カトリック教会によって日本の布教活動に資する目的で制作された大判木版画である。その図像のうち5種類は教理に関するものであり、「善人の最期」「悪人の最期」「最後の審判」「煉獄の靈魂の救い」「地獄」である。残りの5種類は聖人像であり、「イエスの聖心」「聖母子」「幼子イエスと聖ヨセフ」「聖ペトロ」「聖パウロ」である。ド・ロ版画の10種の版木は、制作時から変わらず大浦天主堂境内で保管されてきたと推測される。その版木で摺られた版画群は、パリ外国宣教会 (Missions Étrangères de Paris) の宣教師マルク・マリー・ド・ロ (Marc Marie de Rotz 1840-1914) 神父の指揮によって制作されたものとして、神父の名が冠されて「ド・ロ版画」と通称されている²⁾。その名称が定着したのは近年のことであり、後述するように一時期忘却されていた版画群は昭和時代にカトリック関係者や研究者たちに見いだされてド・ロ神父の仕事であると推定された³⁾。その推定は2つの報告にもとづいており、ひとつは1915年の「パリ外国宣教会年報物故者小伝ド・ロ神父」における言及、もうひとつは1943年のド・ロ神父のもとで働いた中村近蔵の証言である⁴⁾。それらによれば、ド・ロ神父は1875年に完成した大浦天主堂境内の神学校の一

室に活版印刷機を据え付け、そこで本や「聖マリア、聖ヨセフの大きな御絵」などを発行したという。さらに続けて、中村は「大浦天主堂に秘蔵されている十枚の木版、四終に関するものが五枚、主の御心、聖マリア、聖ヨセフ、聖ペトロ、聖パウロは当時の製作によるものと思われる」と述べている⁵⁾。また、1882年刊行の教会発行の週刊誌『カトリックの布教』の記事において、布教地で設置された絵画工房の事例の担当者としてド・ロ神父の名が挙げられている⁶⁾。

いくつかの布教の拠点には、現地の言語で書籍を出版する印刷所があるだけでなく、教会の装飾や布教活動のための絵画工房もある。私たちはとりわけ、土山湾（江南）の孤児院におけるヴァスール神父、マダガスカルにおけるテー神父、横浜（日本）におけるド・ロ宣教師によるものをあげることができる。⁷⁾

ド・ロ神父はフランスの印刷所において技術を学び、印刷事業の担当者として日本に赴任して教会暦や教理書を印刷した⁸⁾。記事では書籍の印刷だけではなく、絵画も制作していたということが示唆されている。さらに、中国で多くの絵画作品を制作したことで知られるフランス人イエズス会士アドルフ・ヴァスール神父（Adolphe Vasseur 1828-99）とともに言及されている点は重要である⁹⁾。ド・ロ神父の遺品を収蔵する長崎のお告げのマリア修道会には、ヴァスール神父が中国で作成した原画をもとにした木版画が複数残されている。その構図の類似性から、ド・ロ神父がそれらを模範としたことが指摘されている¹⁰⁾。また、大浦天主堂キリシタン博物館の収蔵資料の中には、ヴァスール神父の原画をもとにした石版画が7点あり、布教や司牧に活用されたと推測される。ヴァスール神父の作品群については調査中であるが、少なくとも長崎において宣教師が布教に活用して

いたことがうかがえる。ともあれ、先の記事によってド・ロ神父の絵画作品を含めた印刷事業は、フランスのカトリック教会関係者に報告され、認知されていたことがわかる。さらに、現存する一部のド・ロ版画の表装に西洋の技術が採用されていることが指摘された¹¹⁾。この指摘は印刷事業担当者であったド・ロ神父がド・ロ版画に関与している可能性を高めるものである。ド・ロ神父がフランスで学んだ印刷術は当時流行していた石版印刷術である。当時のフランスでは石版印刷によるポスター制作が盛んであり、その裏打ちには布を用いることが一般的であったという。その裏打ちを見知っていたド・ロ神父が、ド・ロ版画に応用したことが示唆される。

以上の点から、ド・ロ版画の制作にはド・ロ神父が関わっていることを前提とし、制作時期として、広く考えてもド・ロ神父が印刷事業担当者として活動した1868～1879年の間と推測することができる。中村の証言にもとづけば、1875年から77年頃までの2年の間であるという。1875年は横浜に移っていたド・ロ神父が長崎に戻り、印刷室が設置される神学校を建設した年である。ここでド・ロ版画の制作動機に関わる当時の時代背景を確認しておく。

1873年にキリシタン制札が撤廃され、カトリック教会は本格的な布教活動に乗り出すことになった。その時期には、先祖伝来の信仰を守っていたキリシタンたちが大浦天主堂を訪れ、秘かに指導を受けながらその司牧を待っていた。よって、祈りの場である教会堂の建立の機運は1870年代後半の時点で高まっており、その内部を飾る礼拝像がこれから必要になると考えられたのであろう。実際に、長崎では1879年から旧黒島天主堂（1879）、旧大明寺教会（1879）、旧堂崎天主堂（1880）、旧鯛ノ浦教会（1881）、旧神ノ島教会（1881）などの木造の初期教会堂が各地で建設された。ド・ロ版画の教理図の5点は布教・司牧に、聖人像は教

会に設置される祈りの対象としての役割を担ったものと思われる。ド・ロ版画がこれらの目的のためにいつまで活用されていたかは不明であるが、五島では20世紀の初め頃に伝道師が教理を説明するのに使用していたという¹²⁾。旧大明寺教会では聖人図が20世紀後半まで祭壇を飾っていた¹³⁾。

1-2 表装と時期

1870年代後半に制作されたド・ロ版画作品はいつ掛軸に仕立てられたのであろうか。木版墨摺りだけのもの、手彩色を加えたもの、ともに制作後裏打ちもない基底材の料紙だけの状態でしばらく使われたのだろうか。それとも制作と同時に初期ド・ロ版画表装に仕立てられたのであろうか。初期ド・ロ版画表装は、明朝表具の外観と西洋の表装技術が融合して作られた特異な軸装作品である。その特徴としては、裏打ちに布が使用され、特徴的な軸木を有し、表面にワニスを塗布し、特定の表具紙（絨唐紙）を使用している点などが挙げられる。もしド・ロ版画をしばらく未表装の状態で使用していた場合には、折れや裂けなどの損傷が発生し、掛軸装に仕立てる際に本紙には繕いや折伏せといった修理が施されたはずである。大浦天主堂キリシタン博物館が収蔵するド・ロ版画のうち、初期ド・ロ版画表装が施された制作当時の形態を有する7点に関しては、現段階までの調査では修理痕が確認されていない。そのため、これらの作品は制作後すぐに軸装に仕立てられた可能性が高い。ただし、7点のうち《聖母子》(R-d-23)のみ本紙と表具紙に肌裏打ちが施されている例があるため、判断には今後のさらなる調査を必要とする。

別稿の「ド・ロ版画表装の独自性」では初期ド・ロ版画表装を一括にして考察を試みたが、実際には8点（先述した7点の他に修復痕のある《最後の審判》を含めた数）の初期ド・ロ版画表装の中に差異も確認される¹⁴⁾。たとえば、上述の肌裏打

ちの有無の他、ワニスの塗布量の違いや明朝風の紙片に使用された装飾紙の種類の違いが見られる。このように少なくとも3つの項目が仕立ての方法の違いとして確認できるということは、一連の初期ド・ロ版画表装が一度にまとめて制作されたわけではなく、試行錯誤しながら作られていったことを示唆しているのではないだろうか。2021年に我々が修理作業を行った《最後の審判》には目視でワニスの塗布の形跡をはっきりと確認することができず、微量に塗布されたか、または塗布されていない可能性もある。他の作品においても塗布の量が多いものもあれば少ないものもある。これらの違いが示すことは、軸装に仕立てた作品を実際に使用していくなかで得た経験を反映させ、実験的に改良を加えながら作成をしたということではないだろうか。

2 昭和におけるド・ロ版画の評価

ド・ロ版画はその役割を終えた後、しばらく忘れられていた時期がある。その存在が見いだされ、様々な記録や報告に登場するのは1930年代である。本章では、「ド・ロ版画」として認識されていく過程とその背景についてみていきたい。

2-1 1930年代のド・ロ版画の発見

長崎教区には1927年に日本人司教が誕生し、教区の運営は日本人司祭に任され、パリ外国宣教会宣教師たちは福岡に移っている。大浦天主堂にはそれまで同地で活動した彼らの遺産が残されており、そのなかにド・ロ版画が含まれていた。その当時の日本人司祭はド・ロ版画のことを認識していたのだろうか。パリ外国宣教会によって生み出されたド・ロ版画は、伝道師が使用していたという言い伝えがある一方で、日本人司祭たちが使用していたという記録はない。当時、近代においてはじめて日本人司祭が誕生したのは1882年であり、

長い修学期間を経る必要がある司祭よりも伝道師の数が圧倒的に多かったことが関係しているだろう¹⁵⁾。また、日本人司祭には神学校・伝道師学校における教育や、長崎の外における未信徒への布教活動も任されていた¹⁶⁾。よって、伝道師が長崎を中心とした教理の教授に活躍し、ド・ロ版画を使用する主な担い手となっていた可能性がある¹⁷⁾。

さらに、大浦天主堂境内にあった神学校は、パリ外国宣教会が長崎を去る数年前である1925年に移転していたが、1930年3月に再び大浦の神学校に戻る¹⁸⁾。この移転の機会に大浦天主堂に保管されるパリ外国宣教会の遺産を見出したものと推測される。1933年の『長崎のカトリック教報』の記事にその存在を確認することができる。それは神学校で行われた校舎移転を祝うイベントの様子を伝える記事である。その記事によれば神学校は1933年4月に大浦近隣の東山手に再度移転をし、その年の6月29日に移転先である校舎を一般公開してその際に大浦天主堂と神学校、そして個人が収蔵する貴重な資料を展示したという。

廣大な應接間には大浦天主堂所蔵の木版、並に木版畫各十個、浦岡倉松氏所蔵の切支丹文献及び遺物、神學校所蔵の珍本などを陳列して觀覽に供した。參觀者は切支丹の血を受けたものが多かつた丈けに、切支丹遺物に痛く引付けられ、又木版畫の地獄の繪などに痛感している者もあり、古ぼけた漢羅字典などを眺めては、昔の邦人神父が如何に苦心して羅典語を學ばれたかを嘆賞し、明治維新當時の祈を誦へて聞かせるお婆さん等さへあつた。圖書室は整理中で觀覽に供する事出来なかつたが、古書、殊に二三百年前の洋書が多い点に於いては、長崎には類を見ないであらう。¹⁹⁾

ここで言及される「木版」「木版畫」「各十個」「地獄」という名称から、ド・ロ版画と版木であるこ

とが推測される。この時点では、パリ外国宣教会のド・ロ神父が制作したということは把握されておらず、「切支丹文献及び遺物」とともに展示されていることから、当時はすでに布教・司牧などに使用される現役のものではなくなっていたことが想像される。

この時期に大浦天主堂境内においてド・ロ版画、もしくは版木の存在を確認したという2つの報告がある。ひとつは、1938年の永見徳太郎による報告である²⁰⁾。永見は長崎出身の南蛮美術収集家であり、長崎の美術研究にも取り組んだ人物である²¹⁾。報告には大浦天主堂所蔵の版木として写真が掲載されている。ふたつめは、美術史家の西村貞による報告である²²⁾。西村の報告は1960年に発表されたものだが、「30年ほどまえ」に長崎の神学校で版木を見せてもらったと記している。また、1939年の教区報にはド・ロ版画の《煉獄の靈魂の救い》の写真が掲載されており、「明治初年大浦天主堂で製作された大木版画」と紹介されている²³⁾。その後、永見の報告が参照されて、キリシタン美術品や遺物に関する研究書や長崎の版画に関する研究のなかで宗教版画として紹介されることはあったが、ド・ロ神父に関する言及はみられない²⁴⁾。

2-2 ド・ロ版画発見と再印刷の背景

1930年代に永見や西村が大浦天主堂を訪ねた背景には、彼らがキリシタン文化に関心をもち、その遺物が残る場所として長崎のカトリック教会、さらには大浦天主堂を認識していたことがある。長崎教区では、昭和初期には大浦天主堂境内と浦上天主堂境内に、キリシタン関係遺物の陳列所を設置していた。1923年に新村出が浦上天主堂の「教師館」（司祭館と推測される）においてメダイなどが陳列常置されているのを見学したという²⁵⁾。他方、大浦天主堂では司祭館の応接間に信徒所有のキリシタン関係遺物が陳列されていた。1930年

の第1回長崎開港記念祭の一環で開かれた貿易展では、その展示会場のひとつに大浦天主堂が選ばれ、陳列室を一般公開したという記録がある²⁶⁾。大浦天主堂としてははじめての一般公開であったらしいことが記事からうかがえる。1932年の大浦天主堂で開かれたバザーでは「切支丹遺物陳列所」を一般公開したとあるため、1930年以降、司祭館の陳列は何らかの折に一般公開されるものとなったのだろう²⁷⁾。その後、その信徒が収集した資料は1939年に大浦天主堂に寄贈された²⁸⁾。同年の1939年には大浦天主堂境内にきりしたん文化研究所が設置されており、境内の展示はより多くの研究者に知られることになったといえる。

こうしたキリシタン遺物に対する関心の高まりは明治期にさかのぼる。1906（明治39）年に開催された東京帝室博物館（現在の東京国立博物館）のキリシタン関係遺物の展示によって、キリシタン文化に注目が集まり、キリシタン研究の発展、さらに関連遺物の発見が相次いだ²⁹⁾。文学界にも影響を与え、キリシタンをテーマした作品も発表された。大正期にはフランシスコ・ザビエルの肖像画などが発見され、マスコミにも取り上げられた結果、全国的なキリシタンブームへと発展した。キリシタン遺物を含めた南蛮美術品の蒐集家が現れ、長崎から多くの関連遺物が全国に出回っていった。1939年の教区報には、「きりしたん贗造遺物」と題した随筆が寄稿されており、「きりしたん遺物の骨董的価値は驚くほど高かった」と述べ、同時に多くの贗造品が出回っていたことも指摘されており、その需要をうかがい知ることができる³⁰⁾。先述した永見は切支丹木版画を探求していくなかで、ド・ロ版画を見つけたという。こうしたキリシタン遺物に対する関心は、長崎のカトリック教会にも影響を与え、その需要に応えるかたちで展示を実施することになったといえる。

また、当時の大浦天主堂境内がカトリック教会における知の拠点としての役割を果たしていたこ

とも重要である³¹⁾。1930年代に神学校校長を務めた浦川和三郎神父（1876-1955）³²⁾は日本キリスト教史の研究者として多数の著作を発表している。キリシタン遺物や宣教師たちの遺産の価値を知る人物であったといえよう。永見や西村は浦川神父にド・ロ版画について教授を受けたと記している。ド・ロ版画の発見はこうした状況下のなかで行ったものと推測される。さらに、ド・ロ版画の発見者たちは後年の印刷に関わっており、1930年代に版木で摺ったという証言が2回にわたって伝えられる。先に紹介した、永見と西村の報告である。西村は神学校に務めていた、浦川神父の甥である岩永正己に版木を見せてもらい、その際にこれから版木で摺ってみるという話を聞いたという³³⁾。その後、「ごく少数が摺刷されたようだ」としている。永見は1938年に浦川神父の許可を得て刷ったとしている³⁴⁾。この時に「取敢へず墨摺一組十投を大浦天主堂へ献上した」とある。

この2回の機会にどの程度摺られたかは不明であるが、彩色ある古いものが10枚1組で揃って保管されている例がないことから、揃って収蔵されている場合はこの2回のどちらかによるものである可能性がある。この2回の機会に摺られたものと収蔵先の関係が記録により示唆されるのは2か所である。ひとつは、九州大学附属図書館収蔵のド・ロ版画10点である。同図書館の収蔵情報によれば、1938年11月5日が受入日と記され、「切支丹版画集」（ド・ロ版画を指す）を含む、漢籍と和書を長崎公教神学校から購入し、その納入者は岩永正己であるとしている。納入者が岩永であるという点と収蔵年代から、1930年頃に刷ったものが納入された可能性がある。もうひとつは、長崎歴史文化博物館収蔵のド・ロ版画10点である。保管箱には寄贈者の永見徳太郎の名が記されている。永見は1948から49年に長崎県の図書館・博物館に郷土資料を寄贈したという³⁵⁾。そのなかにド・ロ版画も含まれていたのかもしれない。

2-3 ド・ロ神父顕彰事業と文化財としてのド・ロ版画

先にみてきたとおり、1930～1940年代にかけてド・ロ版画は長崎のカトリック関係者の間では知られるものとなっていた。この時期にはド・ロ版画がド・ロ神父の仕事であることを指摘する中村の証言もあった。しかし、1960年の西村貞の報告や浮世絵研究者の書籍などでは、版画の存在には言及するものの、ド・ロ神父の名は出てこない。現在のように神父の名が冠されて「ド・ロ版画」と呼ばれ、長崎の文化財となる過程には、ド・ロ神父の顕彰事業が大きく影響している。

ド・ロ神父は1879年に外海（長崎市）に赴任し、同地域の司牧を担当することになった。神父は教会堂を建立して信徒の指導を行うだけでなく、彼らの生活水準を高めるために様々なことに取り組んだ。その献身的な働きにより、「外海の聖者」として尊敬されている。

ド・ロ神父の顕彰事業は1957年に行われた出津教会の建立75周年記念行事の一環として始まっている。ド・ロ神父を顕彰するためにド・ロ神父の胸像が建立され、墓も整備された。さらに、カトリック信徒でキリシタン史の研究者として知られる片岡弥吉が「ド・ロ神父の業績と人となり」について講演をしたという³⁶⁾。その翌年に片岡は「出津の聖者ド・ロ神父」を論文として発表している³⁷⁾。その後、教会、片岡、自治体（外海町）の3者のそれぞれが1960年代～1970年代にかけて神父の顕彰に関して様々な取り組みを行い、その結果、ド・ロ神父の出身地と同地域が姉妹都市提携を結ぶまでに発展した³⁸⁾。1960～70年代におけるド・ロ神父に関わる出来事をまとめておく。

[1960年代]

- 1965年 ド・ロ神父50年周忌、追悼行列
- 1967年 出津救助院・鯛網工場、長崎県有形文化財に指定

1968年 ド・ロ神父記念館、開館

[1970年代]

- 1971年 出津修道院収蔵 木版画筆彩「煉獄の靈魂の救い」長崎県有形文化財に指定
- 1972年 出津教会・大野教会、長崎県有形文化財に指定
旧羅典神学校、重要文化財に指定
- 1974年 片岡弥吉『カトリック教報』第577-586号「ド・ロさま（1）～（10）」寄稿
- 1977年 浦頭教会収蔵 聖教木版画（筆彩三幅）、長崎県有形文化財に指定
- 1977年 片岡弥吉『ある明治の福祉像—ド・ロ神父の生涯』出版
- 1978年 外海町とヴォスロール村（ド・ロ神父出身地）、姉妹都市提携を締結
- 1979年 ド・ロ神父の墓を再整備

1967年にド・ロ神父が手掛けた建造物が長崎県の文化財指定を受け、その翌年にド・ロ神父記念館が開館した。同館にはド・ロ神父の遺品の他、地域の民俗資料も展示されており、神父と地域の結びつきを感じさせる。

1971年、出津修道院収蔵のド・ロ版画が県の文化財指定を受けている。これはド・ロ神父記念館の開館により、ド・ロ神父の遺品資料の整理が進んだ成果と推測される。この時期に片岡が再びド・ロ神父の顕彰を目的にド・ロ神父の事績の調査に取り組んでいる。1974年にはド・ロ神父の没後60年にあたる年として教区報にド・ロ神父を紹介する記事を10回にわたって執筆した。同年には外海町が町誌を発行しており、片岡はその監修と執筆に協力をしている。そして現在、ド・ロ神父の幅広い活動を一冊にまとめた、片岡の著作『ある明治の福祉像—ド・ロ神父の生涯』が発表された³⁹⁾。そこでは1975年にド・ロ神父の出身地ヴォスロール村で調査を実施したことが述べられている

る。その際の交流が、1978年外海町とヴォスロール村との姉妹都市提携に繋がったという。片岡は記事や著作のなかで自身の調査結果と永見の報告や中村近蔵ノートを参考にド・ロ版画についても言及し、ド・ロ版画をド・ロ神父の重要な仕事のひとつに位置づけた。片岡は「ド・ロ版大木版画」と呼び、この頃からド・ロ版画という呼び方が定着していったと思われる。

現在の外海地域には出津文化村が形成され、出津救助院とド・ロ版画が展示されるド・ロ神父記念館が中心となり、ド・ロ神父の事績を伝える場となっている。そのなかでド・ロ版画が展示されている意義は大きく、片岡の著作とともにド・ロ版画の周知に大きな役割を果たしているといえる。

3 ド・ロ版画の受容—展示と修復

各地で使用されたド・ロ版画は、布教・司牧・礼拝という、その本来の役割を終えた後、各々が様々な経緯を経て現在の保管場所に落ち着いている⁴⁰⁾。現存が確認された88点のうちの半数は展示施設に収蔵されており、歴史資料のひとつとして展示されている。ここでは信徒にキリスト教の教義を説明するための布教・司牧の補助媒体として、もしくは礼拝の対象としてではなく、日本のキリスト教史を物語る資料のひとつになっているのである。現存するド・ロ版画のなかには、地域の文化財としての価値を得ているものもある。こうした役割の変更には、我々のド・ロ版画の受容の仕方における変化が影響を与えたといえよう。先述したように、日本のキリスト教の歴史は明治大正期に始まるキリシタンブームを背景に注目を集め、各地で保管されるキリシタン関連資料には高い市場価値が与えられた。ド・ロ版画の評価にもこうした社会背景が無関係ではないといえる。

また、ド・ロ版画における受容の変化は、表装や修復に反映している。本来の目的での活用を継

続するために修復されたことも考えられるが、現在の調査結果をふまえると、修復の契機は展示に資するために実施されていることがほとんどである。また、表装形態の変更も同様である。本章では、ド・ロ版画の受容の具体的な事例として、大浦天主堂キリシタン博物館の収蔵資料を中心にその収蔵経緯と修復、そして展示に関する情報をまとめる。

3-1 大浦天主堂収蔵ド・ロ版画の収蔵と展示

大浦天主堂キリシタン博物館は23点のド・ロ版画を収蔵している。大浦天主堂は1962年まで司教座がおかれ、長崎教区の本部でもあったことから、教区各地の資料が集まる場所であった。ド・ロ版画23点のうち、《聖母子》(R-d-20)と《イエスの聖心》(R-d-17)は、先の述べたとおり旧大明寺教会の祭壇に掲示されていたものである。1975年に教会が解体され、その後、大浦天主堂に移管されたという。

その他の資料について収蔵経緯に関する情報は無いものの、いくつかの報告においてその存在が確認される。後年に発表された永見の遺稿には、「大浦天主堂蔵版画は墨一色摺に筆彩色を施したものであるから相当絵心をもった絵師により仕上が出来たのである」⁴¹⁾とあり、彩色されたものが1938年当時大浦天主堂にあったことが示唆される。先に紹介したとおり、1933年の教区報が伝える記事によれば「木版畫各十個」が展示され、1938年に永見が印刷して大浦天主堂に寄贈しているため大浦天主堂には10枚1組が2つあるはずであるが、現在の当館の収蔵状況を考えるとその後の収蔵状況に変化があったようである。この他にも摺った機会があったことは否定できないが、そうした情報を今のところ見つけることができていない。

片岡の著作(1977)のなかで、大浦天主堂収蔵ド・ロ版画について4点の言及がある⁴²⁾。その4点を含む8点は、ド・ロ神父時代に表装されたと

推測される初期ド・ロ版画表装を有する。これらのうち7点は修復された痕が無く、その役割を終えた後、保管されていたままであったようである。1990年頃には、券売所の移設に伴い、キリシタン関係資料を展示していた施設を旧羅典神学校に移し、そこでは収蔵する版本も含めたド・ロ版画も展示された。2018年4月に開館した大浦天主堂キリシタン博物館では、同館の主要な展示資料のひとつとしてド・ロ版画展示室を設け、版本と版画の展示を行っている。

3-2 大浦天主堂収蔵ド・ロ版画の修理

初期ド・ロ版画表装作品の中では《最後の審判》が唯一過去に修理されている。修理報告書にて明記の通り、オリジナルの初期ド・ロ版画表装から本紙部分のみを取り外し、新しく裏打ちを施して、新調した表具裂を使用して従来の伝統的な技法で掛軸に装丁されている。その本格解体修理の時期は不明であるが、その損傷状態と新しい表装に使用された裏打紙と表具裂から20世紀前半には修理がされていたのではないかと推測する。

作品の損傷を見ると、真鍮が使用された光背部分はすでに修理時には料紙および裏打布が絵具焼けのために欠落していることがわかる。これだけの損傷が進行するのにどれだけの時間を必要とするかは正確な情報は今後の調査実験を必要とするが、少なくとも数十年の時間は要すると思われる。一方、改装に使用された裏打紙を見てみると、本紙の肌裏打ちに使用された紙は約267mm×395mm（8寸8分×1尺3寸）と、一般的に美濃判と呼ばれる小判の楮紙が使用されていることがわかる。現代では肌裏紙には二三判と呼ばれる大判の紙を使用するのが一般的である。我が国における表装技術と材料の変遷の中で、肌裏打ち用の紙の寸法が、小判から四ツ判や二三判といった大型の紙に変わった時期はまだ調査研究段階であり、はっきりとしたことは言及できないが、1960年代

には本紙肌裏紙は大判に移行していると考えられる。また、使用された綾地の緞子も現代の製法のものとは思われないため、総括的に20世紀前半の修理であると考えた。

ではなぜ《最後の審判》のみ早い時期に修理がされたのであろうか。ひとつには光背の損傷が著しかったことが考えられる。裏打布も焼け落ちるほどの状態であった。しかし、ワニスの表面加工がなされていない（または少量にとどめている）こととの関連性は考えられないであろうか。現在では作品劣化の元凶としてみなされるワニスの塗布があることによって、他の作品は本紙自体の損傷などが避けられていた事も考えられる。《最後の審判》がプロトタイプとして先んじて軸装にされたものなのか、それともワニス塗布の弊害を確認した後に制作された後発のものなのか、今後他作品の修理時に集めた情報をもとに考察を進めたい。

他に博物館の所蔵するド・ロ版画作品の中では《地獄》(R-d-12)も初期ド・ロ版画表装に仕立てられていた可能性が考えられる。この作品は過去に修理された際に額装に改装されているが、本紙の損傷状態を顧みると致し方なかったように思われる。使用された裂や作品の状態から、こちらは昭和後期以降の修理ではないだろうか。

《最後の審判》は特に上部の後輪の損傷などが著しかったが、掛軸装を踏襲したのみならず、上下の軸木を初期ド・ロ版画表装に倣って取り付けられていた。その時に作品の真正性を考慮していたかは今となっては知るすべはないが、改装を行った際の技術者にオリジナルの作品への敬意が感じられる。

3-3 他館収蔵ド・ロ版画の修復と展示

他館収蔵のド・ロ版画も含めて修復の事例を見ると、修復後の表装形態にはふたつの選択があったようである。ひとつは、「初期ド・ロ版画表装」

の要素を維持した掛軸装、もうひとつは額装への変更である。現在調査中であるが、現時点でこれまで修復が行われたことを確認しているのは表1のとおりである。表1で挙げた、大浦天主堂キリシタン博物館収蔵以外のド・ロ版画は、保管される地域で使用されていたとされ、初期ド・ロ版画表装を有していた痕跡を確認できるものもある。

堂崎天主堂キリシタン資料館の3点は、1973年に個人宅で発見され、「原型に忠実な状態に復元」⁴³⁾したとあることから、70年代に修復された可能性がある⁴⁴⁾。初期ド・ロ版画表装の特徴のひとつである軸木を有しており、古いものであることがわかる。ド・ロ神父記念館の《煉獄の靈魂の救い》は、1977年の片岡による言及によってその時期には補修され額装となっていることがわかる。資料には裏打ち布を確認することができ、かつては軸装であったと記録が残ることから、初期ド・ロ版画表装を有していたことが示唆される⁴⁵⁾。大刀洗町教育委員会（福岡県）の《地獄》は、2019年に修復の成果を公開している。裏打ち・特徴的な軸木・表具紙などの初期ド・ロ版画表装を有していたことが確認できた。これらはいずれもド・ロ版画本来の役割を終えて展示に活用されている。

修復は保存と展示に資する目的で行われている事例がほとんどであると推測される。長期の保存や展示を考えれば、布教のために持ち運びがしやすい掛軸装ではなく、額装を選択することも自然であるといえる。

大浦天主堂キリシタン博物館収蔵《最後の審判》の修復は、早い時期に修復が実施され、額装ではなく、初期ド・ロ版画表装の特徴のひとつである軸木を維持して修復された。この修復が布教・司牧に用いるためによって行われたのか不明であるが、20世紀前半の状況を考えて可能性は低いように思われる。ド・ロ版画の《最後の審判》に描かれている人々は、丁髷と着物姿の、幕末明治初期の風俗である。当時、その風俗は時代遅れのものとも見えたはずである。大浦天主堂という、当時の教区本部に収蔵されている点も、各地での布教に使用されたものが、役割を終えて移管されていたことを示唆している。よって、展示などの公開を目的に修復が行われた可能性を指摘しておきたい。

表1 修復されたド・ロ版画

収蔵館	主題	修復年代	現在の表装形態
大浦天主堂キリシタン博物館	最後の審判	①20世紀前半か②2021年	掛軸装
大浦天主堂キリシタン博物館	地獄	20世紀後半か	額装
堂崎天主堂キリシタン資料館	善人の最期	1970年代か	掛軸装
堂崎天主堂キリシタン資料館	悪人の最期	1970年代か	掛軸装
堂崎天主堂キリシタン資料館	最後の審判	1970年代か	掛軸装
ド・ロ神父記念館 (お告げの MARIA 修道会)	煉獄の靈魂の救い		額装
天草四郎ミュージアム	悪人の最期		額装
大刀洗町教育委員会	地獄	2019年	掛軸装

おわりに

ド・ロ版画は昭和初期にひとつの転換期を迎えたといえる。その時代には本来の役割を終えていたド・ロ版画は、キリシタン遺物の関連作品（キリシタン美術作品）として人々の関心を引くものとなり、市場に出回り、個人の蒐集家の手に渡った。その場合、「江戸初期の作品」として誤った評価をされることもあった⁴⁶⁾。しかし、こうしたキリシタン文化に対する関心が、ド・ロ版画を再び見出し、現在の評価へとつながる契機を生んだともいえよう。現在、ド・ロ版画はパリ外国宣教会によって日本人向けに生み出された特異な聖画として、さらには長崎の文化財としてその価値を認められている。

一方で、パリ外国宣教会の布教時代にド・ロ版画がどのように活用されたのかを知るためには、布教期のものか後年のものかを区別していく必要も生まれたといえる。その区別の基準は古色の雰囲気をもつかもたないかという、主観的ともいえる判断しか存在しなかったが、ド・ロ版画の表装に関する新しい研究によって客観的なひとつの基準が提示された。ド・ロ版画が版画という性質上、印刷時期を判断することは困難であるが、資料本体の用途に関わる表装から得られる情報は非常に重要であるといえる。後年の印刷に関しては今回指摘した機会以外にも行われている可能性は高く、今後の研究課題として引き続き取り組んでいきたい。

-
- ¹⁾ 郭南燕（当時、国際日本文化研究センター准教授）が主催した研究プロジェクト「キリシタン文学の継承：宣教師の日本語文学」（大学共同利用機構法人・人間文化研究機構助成、2014～2019年）の成果物のひとつとして刊行された『ド・ロ版画の旅－ヨーロッパから上海～長崎への多文化的融合』（郭南燕編、創樹社美術出版、2019年）において調査結果が公表されている。調査には筆者も参加した。
- ²⁾ パリ外国宣教会については主に以下を参照。Catherine Marin, *La Société des Missions Etrangères de Paris - 350 ans à la rencontre de l'Asie 1658-2008*, KARTHALA, 2011. 会のHPも参照した (<https://irfa.paris/en/zonesgeographiques/france/2022.1.13>)。ド・ロ神父の経歴については主に以下を参照。片岡弥吉『ある明治の福祉像－ド・ロ神父の生涯』日本放送局出版会、1977年、17-25、37頁。
- ³⁾ 1961年刊行の『キリシタン美術』（宝文館）には、「よいキリシタンの臨終」と題してド・ロ版画《善人の最期》の図版が掲載されているものの、ド・ロ神父の名はなく、原画を制作した人物としてバザール神父の名が紹介されている。1980年刊行の『長崎県の文化財』（長崎県教育委員会編、42頁）では、現在堂崎天主堂キリシタン資料館で展示されているド・ロ版画を「聖教版画」と紹介し、俗に「ド・ロ木版画」と呼ばれる、と記している。
- ⁴⁾ 前者はパリ外国宣教会の年報に掲載された故人追悼記事（*Société des Missions-Étrangères: Compte rendu des travaux de l'année 1915*, Séminaire des Missions-Étrangères, Paris, 1916, pp. 209-214）である。中村近蔵は1859年に外海地区に生まれ、大浦天主堂附属の神学校で学び、初期邦人司祭のひとりである片岡謙輔神父に指導を受けたという。ド・ロ神父が1879年に外海地区に赴任した際、伝道師としてド・ロ神父の活動を助けた。米寿の祝いにド・ロ神父の思い出を本書で語ったという。中村近蔵「明治初年の開拓者ド・ロー師を偲ぶ（一）」『公教雑誌 聲』810号、41-45頁、1943年9月。中村が残した活動の記録は「中村近蔵ノート」として保管され、ド・ロ神父の様々なエピソードを伝えている。出津カトリック教会『出津教会誌』1983年、143-146頁。
- ⁵⁾ 中村前掲論文、44頁。
- ⁶⁾ 原聖「キリスト教絵解き宣教師たちを追って」『ふらんばー』22号、1995年、103頁。
- ⁷⁾ “Plusieurs centres de missions ne possèdent pas seulement des imprimeries pour publier des ouvrages en langue indigène, ils ont aussi leurs ateliers de peinture pour la décoration des églises et le service de la propagation de la foi. Nous citerons entr'autres ceux établis par le R. P. Vasseur à l'orphelinat de Tou-Sei-Wei(KiangNan), par le P. Taix à Madagascar, par M. de Rotz à Yokohama(Japon).”, *Les Missions catholiques : bulletin hebdomadaire illustré de l'oeuvre de la propagation de la foi*, Tome Quatorzième. Janvier-Décembre 1882, Lyon, p.515.
- ⁸⁾ 片岡、前掲書、38頁。
- ⁹⁾ イエズス会士ヴァスール神父については主に以下を参照。郭、前掲書、61-72頁。

- ¹⁰⁾ 先行研究において、ド・ロ版画がド・ロ神父の遺品に含まれる中国製木版画を参考としていることは指摘されてきた。片岡、前掲書、67頁。鄭巨欣は中国におけるヴァスール絵画の研究成果をもとに、ド・ロ版画との比較分析を行い、図像における具体的な影響関係を明らかにした。「ヴァスール原画とド・ロ版画との比較」郭編、前掲書、83-108頁。
- ¹¹⁾ 杉山恵助「初期ド・ロ版画表装の独自性」大浦天主堂キリシタン博物館『大浦天主堂収蔵ド・ロ版画及び版木の調査研究・保存修復事業 第一期報告書』2022年、28-38頁。
- ¹²⁾ 下口勲『島の信仰の輝き』2012年、55-67頁；野下千年「五島列島のド・ロ版画と堂崎天主堂」郭編前掲書、141-146頁。
- ¹³⁾ 現在、大浦天主堂キリシタン博物館に収蔵されている。教会の解体前に祭壇から版画の取り外しを行った江口源一によれば、中島政利神父が大明寺教会主任司祭時代（1966-1978）に移管されたとある。そのため、1975～1978年の3年の間に移管されたと推測される。江口源一「ド・ロ様と出津文化村」『長崎談叢』第77輯、1991年、105-107頁。ド・ロ版画の聖人図が内陣に飾られていた事例としては、写真にその記録が残る旧函館天主堂をあげることができるが、火災のために教会堂は現存しておらず、ド・ロ版画の行方も不明である。
- ¹⁴⁾ 杉山前掲論文。
- ¹⁵⁾ 1884年時点で、長崎が含まれる南緯教区の56人の司祭のうち3名が日本人司祭であるが、伝道師の数は222名とある。カトリック長崎大司教区編『旅する教会』聖母の騎士社、1977年、20頁。大浦天主堂境内には1880年代に伝道師学校が設置されており、多くの伝道師が同地で誕生したといわれる。
- ¹⁶⁾ 1882年に卒業した第1回卒業生は、深堀達右衛門（1849-1887）、有安浪蔵（秀之進）（1855-1934）、高木源太郎（1855-1931）である。深堀神父は宣教師を助けて未信徒の地に布教にまわり、有安神父は大浦天主堂の主任司祭を補佐し、高木神父は神学校教師を務めたという。1887年には第2回卒業生は6名であり、そのうちの島田喜蔵（1856-1948）は未信徒への布教を任せられ、片岡謙輔（1904没）は神学校教師、深堀忠治は伝道師学校の教師を務めた。
- ¹⁷⁾ 中国で版画を制作したヴァスール神父は、中国には数千人にも上る伝道師がおり、彼らが教義を説明するための補助媒体として版画が有用であることを示唆している。Adolphe Vasseur, *Mélanges sur la Chine : premier volume. Lettres illustrées sur une école chinoise de Saint-Luc, auxiliaire de la Propagation de la foi*, Paris, Société générale de la librairie Catholique Palmé, 1884, p. 32.
- ¹⁸⁾ 長崎の神学校の歴史については以下を参照。中島政利『福音伝道者の苗床－長崎公教神学校史』聖母の騎士社、1977年。
- ¹⁹⁾ 『長崎カトリック教報』1933年7月15日、114号。
- ²⁰⁾ 永見徳太郎「長崎版画 切支丹絵の報告」『浮世絵界』3巻、3号、1938年、5-13頁。
- ²¹⁾ 永見徳太郎については以下を参照。新名規明『永見徳太郎』長崎文献社、2019年。
- ²²⁾ 西村貞「キリシタン美術異聞－新発見“最後の審判図”の正体」『芸術新潮』11巻、3号、205-209頁。
- ²³⁾ 画像は現在ド・ロ神父記念館で展示されているものと推測される。記事では次のように紹介されている。「煉獄の靈魂の為に 今月は煉獄の靈魂の月として特に死せる人々の為に祈るべきである。カットは明治初年大浦天主堂で製作された大木版画」。『長崎カトリック教報』1939年11月1日、265号。
- ²⁴⁾ 西村貞他『キリシタンの美術』宝文館、1961年、口絵：竹村覚『キリシタン遺物の研究』開文社、1964年、292頁；小野忠重『江戸の洋画家』三彩社、1968年、113頁；樋口弘『長崎浮世絵』味燈書屋、1971年、93-94頁。
- ²⁵⁾ 新村出『南蛮更紗』平凡社、189-190頁。
- ²⁶⁾ 『長崎日日新聞』1930年4月27日；『長崎カトリック教報』1930年5月15日、37号。
- ²⁷⁾ 『長崎カトリック教報』1932年4月15日、84号。
- ²⁸⁾ 1939年発行の253号『長崎カトリック教報』（以下、教区報）において、「浦岡氏苦心蒐集の切支丹文献遺物 大浦天主堂に寄贈」と題して所有者である浦岡の死去に際し、遺族から寄贈の申し出があったことが紹介されている。同年の257号の教区報には追加で寄贈があったことが報告される。寄贈者である浦岡については、急逝を報じる同年の252号教区報において、切支丹関係遺物収集家であったことが記されている。また、1930年代に長崎においてキリシタン研究に取り組んだ田北耕也は著作のなかで次のように言及している。「大浦教会の信者でハム製造業者、下黒崎のはなれの復活に努力した浦岡倉松氏が、カトリック教に帰った下川氏から、幾何かの金で譲り受け、この大浦天主堂に預けたもの、紙片の附記は浦岡氏の書いたもので、単なる推定にすぎぬと、浦岡氏本人の談」。田北はこのエピソードを1930年からの3年間の研究調査の内容として紹介しており、探していたキリシタンのオラショの一種を大浦天主堂の司祭館の陳列棚に見つけたことも述べている。続けて「何れにしても6年間、マリヤ観音などと共に、多くの参観者を送迎しながら、顧みられずに居た」と記していることから、1920年代には大浦天主堂の陳列が始められていたと推測される。田北耕也『昭和時代の潜伏キリシタン』日本学術振興会、1954年、14-15頁。
- ²⁹⁾ キリシタン関係遺物の発見と研究の進展については以下を主に参照。新村出・柊源一『吉利支丹文学集 上』朝日新聞社、1957年、149-170頁。現在に至るまでのキリシタン研究史については以下を参照。川村信三「キリシタン研究の過去・現在・未来」川村信三編・キリスト教史学会監修『キリシタン歴史探求の現在と未来』教文館、2021年、13-29頁。
- ³⁰⁾ 『長崎カトリック教報』1939年11月1日、265号。
- ³¹⁾ 詳しくは次の拙論を参照いただきたい。内島美奈子「大浦天主堂附属神学校の歴史と役割」下園知弥・宮川由衣編『西南学院大学博物館研究叢書 宣教師とキリシタン』花乱社、2021年、61-62頁。

- ³²⁾ 浦川和三郎神父は1909年に大浦教会主任司祭となり、長崎の神学校の教授を兼任していた。1928年に日本人として最初の神学校校長となり、1941年に仙台司教となるまで務めている。浦川神父はキリシタン史研究のほか、多数の信心書や神学書の翻訳などを発表した。浦川神父の略歴について以下を参照。片岡瑠美子「浦川司教と『切支丹の復活』史研究」『プティジャン司教書簡集』長崎地方文化史研究所編、1986年、302-307頁。池田敏雄『人物中心の日本カトリック史』サンパウロ、1998年、353-358頁。
- ³³⁾ 西村前掲論文、206頁。岩永については田北も言及しており、浦上カトリック教会の信者で、浦川師「切支丹の復活」の著述を助けた人物として紹介している。また、潜伏キリシタンの祈りの言葉を信者から直接入手することに成功した最初の人とも記している。田北、前掲書、12頁。
- ³⁴⁾ 永見、前掲論文（1958）、95頁。
- ³⁵⁾ 新名、前掲書、205-207頁。
- ³⁶⁾ 出津カトリック教会、前掲書、120頁。
- ³⁷⁾ 『長崎談叢』第38輯、1958年、1-12頁。
- ³⁸⁾ 外海地域の取り組みについては以下を参照。外海町役場『外海町誌』1974年：出津カトリック教会、前掲書、120-123頁：外海町役場『外海－キリシタンの里－』1983年。
- ³⁹⁾ 「あとがき」には本書執筆の動機が次のように記されている。NHKのローカル番組やセミナーなどでド・ロ神父の話をする機会があり、そのたびにド・ロ神父の事跡を調べ続け、「そのすぐれた人間性に対する敬慕の念はいよいよ深まって、ひろくこの神父のことを知っていただきたい念願にかられた」という。片岡、前掲書、238頁。
- ⁴⁰⁾ 全国の収蔵状況と経緯については次の拙論を参照いただきたい。内島美奈子「ド・ロ版画と関連資料の収蔵状況」郭編前掲書、147-163頁。
- ⁴¹⁾ 永見徳太郎「大浦天主堂の木版画について」『長崎談叢』第38輯、1958年、96頁。
- ⁴²⁾ 「大浦天主堂には製作当時の墨刷筆彩、軸装のもので現存するのは、大浦天主堂に「人類の復活と公審判」「善人の最期」「悪人の最期」（後者は破損がひどい）五島市の浦頭教会に「善人の最期」「悪人の最期」「人類の復活と最後の審判」の三幅（共に破損がひどい）伊王島大明寺教会に「イエズスの聖心」「聖母マリア」（共に破損がひどい）、補修額装にしたものが、大浦天主堂に「地獄」、外海町ド・ロ神父記念館に「煉獄の靈魂の救い」があり、ド・ロ神父記念館蔵の一幅と浦頭教会の三幅とは長崎県文化財に指定されている。」片岡、前掲書、64-65頁。
- ⁴³⁾ 野下、郭編前掲書、144頁。
- ⁴⁴⁾ 1980年に出版された『長崎県の文化財』（長崎県教育委員会編）では、白黒図版が掲載されており、修復済みの状態であることがわかる。
- ⁴⁵⁾ 1973年に出版された『長崎県の文化財』（長崎県教育委員会編）では、「軸装128cm×63cmで、当時のままよく保存されている」と記されている。
- ⁴⁶⁾ 『読売新聞京都版』1960年1月18日。